

万葉集「玉の緒ばかり」考

A Study of “Tamano-o Bakari” in Manyoshu

宮川 久美

MIYAGAWA Kumi

万葉集の「玉の緒ばかり」は短い間の比喩ではなく、玉の緒がかすかに肌に触れる程度の不十分なもどかしい触れ方の比喩である。いっそのこと「桑子にもならましものを」とは、桑子になれば、やがて糸となり、玉を貫く緒となつて、それを恋しい人が身につければ、恋しい人の肌に触れることができるかもしれない、今なまじ人間でいて全く逢えずに苦しむよりはまだましだ、と恋の苦しみを表現したものである。

キーワード：万葉集、玉の緒、桑子

Key Words : Manyoshu, Tamano-o, Kuwako

一 はじめに

なかなか人にあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり

(万葉集卷十二・三〇八六)

「なかなか人にあらずは桑子にもならましものを」とは中途半端

に人としてあるよりは、いっそのこと桑子（蚕）にでもなったらよろうものを、という意味である。現状を不満に思い、現実とは異なる状態を仮想して、いっその方がましだろうにという気持ちを表す。恋に悩んでいるのが現状であることは諸説一致している。では「桑子」になるとどのようなメリットがあるのだろうか。従来の説を整理するとおおむね次の三つとなる。

一、蚕は物思いがいい（佐々木信綱 1951、鴻巣盛廣 1957、高木市之助・五味智英・大野晋 1960、青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 1982）

二、蚕は繭ごもるものであるから、君と共に繭ごもることができる（土屋文明 1963）

三、蚕の寿命は短いから蚕の身になれば早く世を去ることができる（伊藤博 2005）

一については、たとえば、「かくばかり恋ひつつあらずは石木にもならましものを物思はずして」（万葉集卷四・七二二）のように、物思いのない無情のものになりたいという気持はもつともであり、蚕が無情のものだと認めれば、そうなりたいと願うだけのメリットはあると思われる。しかし、なぜそれが蚕なのかという点が疑問である。二については、人間でいるときでさえ満足に逢えないのに、蚕になったからといって、必ずしも君と共に繭ごもれるという保証もない以上、蚕になりたいと望む根拠が希薄である。三については、「なかなか死なば安けむ」（万葉集卷十二・二九四〇）とか、「かくばかり恋ひつつあらずは高山の磐根し巻きて死なましものを」（同卷一・八六）とか、死ねば何の物思ひもなく安らかだろうから、いっそのこと死にたいという気持ちはよくわかるのだが、早く世を去るために、どうして蚕を経

由しなければならぬのか、そこがよくわからない。このように、「桑子にもならましものを」の真意は、これまでのところ明白には説明されていないように思われる。また、第五句の「玉の緒ばかり」という句について、これまで、「玉の緒」は短いものの比喩・短い時間の比喩とされ、「ほんの短い間でも」（佐々木信綱 1961、鴻巣盛廣 1967、高木市之助・五味智英・大野晋 1960、佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司 1975、澤久孝 1963、佐竹昭弘 2002、日本国語大辞典 第一版 1975・第二版 2001「玉の緒」の項）または、「同じようにはかない命をつなぐだけのありさまで」（青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 1986）「玉の緒のはかない命をつなぐだけのありさまで」（伊藤博 2006）などの意とされるのだが、いずれも上四句との意味のつながりがスムーズであるとは言いがたい。また、「玉の緒のようにはかない命」ということが万葉集において言えるのかどうか、という点も疑問に感じる。本稿では、標出歌の「桑子にもならましものを」の真意は何か、「玉の緒ばかり」の意味および上四句とのつながりについて考察する。

二 万葉集の「玉の緒」

「玉の緒」とは玉を貫く緒のことである。「緒」は細く長い紐状のもので、ものをつなぎあわせ、つなぎとめる。その緒が切れるところから、次のような例が見られる。

まそ鏡見しがと思ふ妹に逢はぬかも玉の緒の絶えたる恋の繁きこのころ

（卷十一 二二七 古歌集）

天地のよりあひの極み玉の緒の絶えじと思ふ妹があたり見つ

（卷十一 二二七 古歌集）

息の緒に思へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも

（卷十一 二二七八）
玉の緒の絶えたる恋の乱れには死なまくのみぞまたも逢はずして

（卷十一 二二七八）
かくしつゝあり慰めて玉の緒の絶えて別れば術なかるべし

（卷十一 二二八二）
恋ふることまされる今は玉の緒の絶えて乱れて死ぬべく思ほゆ

（卷十一 二二八三）
：新た世に共にあらむと 玉の緒の絶えじ妹と 結びてし言は果たさず 思へりし心は遂げず：

（卷三 一四八 高橋虫麻呂）
これらは、「絶ゆ」の枕詞となっており、「乱る」「別る」はその縁語である。

うち日さす宮道に逢ひし人妻ゆゑに玉の緒の思ひ乱れて寝る夜しぞ多き

（卷十一 二二八五 古歌集）
うち日さす宮道を行くにわが裳は破れぬ玉の緒の思ひ乱れて家にあらましを

（卷七 二二八〇 人麻呂歌集）
は「思ひ」乱る」の枕詞となっている。

片糸もち貫きたる玉の緒を弱み乱れやしなむ人の知るべく

（卷十一 二二七九）
玉の緒を片緒に撻りて緒を弱み乱るる時に恋ひざらめやも

（卷十二 三〇八一）
これらは、「玉の緒」を含む上の句が「乱る」を介して下の句を導いている。「片糸」「片緒」は片思いの比喩である。

このように、玉を貫く緒は切れやすいもののようであるが、一方で、真珠は緒絶えしにきと聞きしゆゑにその緒また貫きわが玉にせむ

（卷十六 三八一四）

古ゆ言ひ継ぎけらく 恋すれば苦しきものと 玉の緒の継ぎては言へど…

(巻十三―三三五)

…衣こそばそれ破れぬれば 継ぎつつもまたも逢ふといへ 玉こそば緒の絶えぬれば くくりつつまたも合ふといへ またも逢はぬものは妻にありけり

(巻十三―三三三〇)

のように、絶えた緒は、取り返しがつかないというものでもなくて、また継いで、貫きくくり合わせることでできるものである。また、

玉の緒のくくり寄せつつ末つひに行きは別れず同じ緒にあらむ

(巻十一―二七九〇)

白玉の間あけつつ貫ける緒もくくりよすれば後も合ふものそ

(巻十一―二四四八)

玉の緒の間も置かず見まく欲りわが思ふ妹は家遠くありて

(巻十一―二七九三)

のように玉と玉の「間あけつつ」貫いた緒も、くくり寄せれば「間も置かず」貫いてまたも合うことができるという。また、

玉の緒を沫緒に搓りて結べらばありて後にも逢はさらめやも

(巻四―七六三 紀郎女)

は、「玉の緒を沫緒に搓りて結ぶ」ということが、末長い契りを結ぶということの比喻表現となっている歌である。(宮川久美 1993)

さらに、

相思はずあるらむ子ゆゑ玉の緒の長き春日を思ひ暮らさく

(巻十一―一九三六)

君に逢はず久しくなりぬ玉の緒の長き命の惜しけくもなし

(巻十一―三〇八二)

たはごとや人の言ひつる玉の緒の長くと君は言ひてしものを

(巻十三―三三三四)

のように、「長し」の枕詞ともなっている。「玉の緒の」が「長し」の枕詞となった例は万葉集中に三例見られるが、「短し」の枕詞となった例は一例もない。もともと「緒」というものが、細く長い紐状のものをいうのであるから、当然と言えば、当然である。万葉集中には「年の緒」という言葉があるが、これも年月の長さを長い緒にたとえた表現であり、十七例すべて「年の緒長く」の形で用いられる。以上のことから、「玉の緒」を短いもののたとえとするのは、万葉集においては、あたらないと考えられる。

また、「玉の緒」がはっきりと「命」そのものの意味で用いられたとは言えないが、右の例の「玉の緒の長くと君は言ひてしものを」は訃報に接した作者が、あなたは長くと言っていたのに、と嘆いているのであり、何が「長く」なのかといえ、命が、であろう。そのすぐ前の例も「玉の緒の長き命」と続いており、「玉の緒」はただ、「長し」の枕詞であるだけでなく、「玉の緒」のような「長き命」と続いて読まれて不自然だとは思われない意味ももっていたであろう。

恋ふることまされる今は玉の緒の絶えて乱れて死ぬべく思ほゆ

(巻十二―三〇八三)

この歌でも、「玉の緒」は「絶ゆ」の枕詞ではあるが、玉の緒が絶えて玉が散り乱れることと「死ぬ」こととはイメージとして重なっている。

…たらちねの御母の命 なにしかも時しはあらむを まそ鏡見れども飽かず 玉の緒の惜しき盛りに 立つ霧の失せぬることく 置く露の消ぬるがごとく 玉藻なすなびき臥伏し 行く水の留めかねつと 狂言か人の言ひつる 逆言か人の告げつる…

(巻十九―四二二四)

これは、家持が娘婿の母親が亡くなったという知らせを受けて、詠んだ挽歌である。「玉の緒の」は同音反復で「惜しき」の「を」にかかるとする説が多いが（小学館古語大辞典 1983、角川古語大辞典 1984、小学館日本国語大辞典 第二版 2001 など）、これまでの例から考えてそのような形式的なかり方ではないと思われる。「玉の緒」のように長く続くべき命のまだまだ惜しい盛りに亡くなったといつて悼んでいるのであろう。すなわち、「玉の緒の」で、「玉の緒の長き命の」の意味まで含み得ていると思われる。同じような例として、次のようなものが挙げられる。

たらちねの新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着ほしも

（巻十四—三三五〇 或本歌）

「たらちねの」は「母」にかかる枕詞であるが、この歌では、「たらちねの」は「たらちねの母の」の意味まで含んでいると考えられる。

このように、「玉の緒」は「長し」にかかる枕詞であり、さらに「長き命」の意味をも十分に含むことのできる言葉であったと思われる。したがって、「玉の緒のようにほかない命」とイメージすることには万葉集においてはなかったと考えられるし、「玉の緒」を短い時間のたとえとするのも適当ではないといえるだろう。

三 桑子にもならましものを

上四句「なかなか人にあらずは桑子にもならましものを」と「玉の緒ばかり」とのつながりについては、次の歌が参考になるのではないだろうか。

なかなか人にあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ

（巻三—三四三）

これは、旅人の讃酒歌のひとつである。人として満足に生きられない現状を不満に思い、いつそのこと酒壺になってしまいたい、という。今のままでいるよりは、酒壺になるほうがまだましだという何らかのメリットがあるからである。第五句はそう望む理由が述べられている。つまり酒壺になれば、その体内に貴い酒をなみなみと満たすことができる、そうして酒に染みようというのである。標出歌の場合、「桑子」になりたいというのはこのまま人として生きているよりは多少でもまだましという何らかのメリットがあるからである。また、第五句は、たしかに言葉が足りないようではあるが、何か、そのメリットを説明しているのではないだろうか。

なかなか人にあらずは 酒壺になったらよからう （そうすれば）酒

に染みていられる

なかなか人にあらずは 桑子になったらよからう （そうすれば）玉

の緒程度でも…

のように。たとえ玉の緒程度でも…、と言いきしているが、桑子になれば、玉の緒程度のメリットが期待できるに違いない。玉の緒程度のメリットとは何か。それは恋しい人が身につけた玉の緒が微かに恋しい人の肌に触れる、その程度の密かで微かな喜びである。桑子になればやがては絹糸となり、玉を貫く緒となって、いつか恋しい人の手にまかれ首にかけられる可能性もゼロではない、もしそうならば、微かにでも恋しい人の肌に触れることができるだろう、というのである。まず桑子になって、桑子が吐き出す糸となって、それから玉を貫く緒となって、それから妹がそれを身につけて、その緒が密かに微かに妹の肌に触れる…。実に迂遠で実に微かなメリットだが、なまじ人間でいて全く触れることもできないよりはましだというのである。結局は、

それほど今の状態がつらく苦しいことを言っている。

わが思ひかくてあらずは玉にもがまことも妹が手にまかれむを

(巻四―七三四)

かくばかり恋ひつつあらずは朝に日に妹が踏むらむ土にあらましを

(巻十一―二六九三)

などと同じ心の歌である。人として逢うことがかなわなければ、いつそのこと玉になれば、また妹が踏むであろう土になれば、たとえ、相手に自分の思いが通じないままであっても、ともかく相手の肌に触れることはできる。たとえわずかでも悲しい人の肌に触れることができるかもしれないという可能性が出てくるのが、なまじ人間でいて、まったく触れることができないよりは、少しはましなのである。いずれもこのような表現によって今の苦しさを嘆いているのである。

掲出歌の言葉の足りないところをおぎなえば、

なかなか人にあらずは桑子にもならましものを玉の緒ばかり妹にふれなむ

とでもなるのではないだろうか。

四 玉の緒ばかり

万葉集中には「玉の緒ばかり」という句を含む歌がもう一首ある。

さ寝らくは玉の緒ばかり恋ふらくは富士の高嶺の鳴沢のこと

(巻十四―三三五八)

これは、「寝ること」のありようについての比喩的表現であると考えられる。どのようなありようの比喩なのか、これまでは、「玉の緒」を短いものとして、ほんのちよつとの間、短い時間の比喩とするのが通説であった。しかし、すでに述べたように、万葉集では「玉の緒」

は長いものとされ、短いといった例はないのである。これについては、原田芳起 1973 にすでに指摘があり、「玉の緒ばかり」が、ただ「短い」という意であると考えることにためらいを感じるとされている。原田氏は右の歌について、相逢うて共に寝ることを、玉を貫く緒の両端が結ばれることにたとえたのであり、緒の末と末がわずかに触れるだけであるから、その触れあいはいかすかであり、またすぐ別れるものでもある、「玉の緒ばかり」はそのような「逢うことのかすかさ」「結ばれる時間の短さ」をたとえたのだとされる。また、掲出の桑子の歌についても、「なまじ人間でなどなくして、蚕になつたらよいのに。そしてたらあの人に触れることもあろう。それが玉の緒の端と端とが一点だけ結ばれるほどの、かすかな瞬時の逢いであろうとも」とされる。

「玉の緒」を短いものとするのには疑問を感じながらも、結論としては「かすかな瞬時の逢い」とされている。しかし、これについては首肯しがたいように思われる。玉の緒の端と端とはしっかりとくくりにせられているのであるから、緒が切れない限りは微かな触れ合いというわけでもないし、瞬時の逢いというわけでもないからである。またもし切れてもくくり寄せてまた合うものであることはすでに述べたとおりである。また、蚕になつたら、あの人に触れることもあろうとされているが、なぜそう期待できるのか根拠は述べておられない。この点については、前節で述べたとおりである。「玉の緒ばかり」は、玉の緒の端と端とが触れるのではなく、玉の緒と肌とが触れることを述べてその触れ合いの微かさを言うのである。

「さ寝らくは玉の緒ばかり」は「寝ること」のありようが「玉の緒」がかすかに肌に触れる程度の触れ方である」という意味であって、「時間の短さ」を言っているのではないだろう。男女の逢いの充実度

は時間の長さによって決まるものではないのではないか。たった一度のたった一夜の逢いであつても、

あしひきの 山田をつくり 山高み 下樋をわしせ 下問いに わが問ふ妹を 下泣きに わが泣く妻を 昨夜こそは 安く肌触れ

(古事記下 歌謡七九―木梨の軽の太子)

笹葉に うつや霰の たしだしに 率寝てむ後は 人は離ゆとも

(同―八〇)

うるはしと さ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

(同―八二)

のように「安く肌触れ」「たしだしに」寝おせた後は、たとえひきさかれようとかまわないと思えるほどの逢いもある。逆に、せつかく寝たことは寝たものの、玉の緒がわずかに肌に触れる程度の触れ合いでしかないような、もどかしい不満足な寝方もあるだろう。「さ寝らくは玉の緒ばかり」の歌は、せつかく寝たのに、玉の緒が肌に触れる程度のもどかしい寝方しかできなかったことを嘆いているのだと思われる。桑子の歌では、その程度でも触れられる可能性があるのなら、いつそのこと桑子になってしまいたい、というのである。

五 おわりに

本稿では、「玉の緒」は本来長いものであり、万葉集ではすべて「長し」にかかること、万葉集の「玉の緒ばかり」が短い間の比喩ではなく、玉の緒がかすかに肌に触れる程度の不十分なものかしかい触れ方の比喩であることを明らかにした。また、現状を不満に思い、こんなことならいつそのこと「石木にもならましものを」(物思いをせず(に済む))「死なましものを」(死ねば物思いをせずに済む))「酒壺にな

りたい」(何の物思いもなく、酒で腹を満たせる)「玉になりたい」(妹が手に巻かれることができる)「朝夕妹が踏む土になりたい」(妹に踏まれてその足の裏に触れられる)等の表現と同じように、「なかなか人にあらずは桑子にもならましものを」は、恋に苦しみ、全く逢えないのならなまじ人間でいるよりいつそのこと桑子になりたいという意味であること、また、「桑子になりたい」というのはどうしてかというところ、まず桑子(蚕)になって、つぎに蚕の吐き出す糸となり、その糸が玉を貫く緒となって、それを恋しい人が身につければ、密かに微かに恋しい人の肌に触れることができるという、迂遠で微かだけれどもゼロではない可能性に希望が持てるだけ、今のこの苦しさよりはましだからだということを明らかにした。

参考文献

- 青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎校注(一九八二年)
『新潮日本古典集成萬葉集 四』新潮社、三六七頁
原田芳起(一九七三年)『平安時代文学語彙の研究 続編』風間書房、二八五頁―二八七頁
伊藤博(二〇〇五年)『萬葉集釋注 六』集英社
鴻巣盛廣(一九三五年)『萬葉集全釋 第四冊』広文堂
宮川久美(一九九三年)『沫雪と沫緒―万葉集七六三番歌をめぐって―』『ことばとことのは』第十集、和泉書院、二二頁―三二頁
佐伯梅友・藤森朋夫・石井庄司(一九七五年)『萬葉集 四』朝日新聞社
佐々木信綱(一九五一年)『評釋萬葉集』六興出版社
佐竹昭広・山田英雄・工藤力男・大谷雅夫・山崎福之校注(二〇〇二

年)「新日本古典文学大系 万葉集三」岩波書店、一八四頁

高木市之助・五味智英・大野晋 校注(一九六〇年)「日本古典文学

大系 萬葉集三」、岩波書店

土屋文明(一九五三年)「萬葉集私注」

日本国語大辞典第一版(一九七五年)小学館、一八八頁

角川古語大辞典(一九九四年)角川書店、二二一頁

小学館古語大辞典(一九九四年)小学館、一〇二四頁

日本国語大辞典第二版(二〇〇一年)小学館、一一一七頁